



学校だより

3月号

文京区立第一中学校 令和5年3月17日(金)

地域の子

校長 田島 佳子

昭和45年から50年ごろの東京の下町では、いたるところに空き地があり、漫画で出てくるような大きなドラム缶がありました。神社では季節ごとに縁日があり屋台がたっていました。学校が終わってから、空き地や公園で待ち合わせをして暗くなるまで、缶蹴り、鬼ごっこ、ゴム縄、手打ち野球を子供たちはしていました。近所のおじさんやおばさんが、「もう暗くなってきたから家に帰りなさい。」とよく声をかけてくれました。家に帰って晩ご飯を食べると、今度は銭湯です。お風呂に行く時間を決めて、そこでまた集合です。一日中遊んでいました。土日や長期休業日には、町会のお祭りやイベントもたくさんありました。あちこちで何かしら楽しいことがありました。児童館もでき始めた頃なので、卓球や室内遊び、楽器演奏、読書など、雨の日はそこで過ごしていました。さらに子供会というのが各町会にありました。ミニ遠足や、探検、発表会やゲーム、スイカ割、ザリガニ釣り、どんぐりや栗ひろいなどが毎週、土日のどちらかにありました。小学校1年生から6年生までがメンバーでした。町会の子は誰でも入れました。縦割りなので、多くのことを学ぶことができました。空き地や公園でも、児童館や子供会でも地域の大人がいつも見守ってくれていました。夏になるとあちこちの神社でお祭りです。さらに公園や学校でも盆踊りがありました。商店街の人とも顔なじみでした。

私が小学校の時と高校の時に母は、PTAの役員をやっていました。私が社会人になり結婚して地元を離れても母は民生委員等をやっていた関係で、地域の小学校や中学校、高校の入学式や卒業式に呼ばれていました。わが子は大きくなってしまったけど、地域の子の晴れ姿をみるのは、毎年の楽しみのようなものでした。確かに私も地域に育ててもらいました。時代とともに生活様式や考え方が変わり、人との関りが薄くなってきたように感じます。コロナでさらにオンライン化が進み、離れていても話や会議ができるようになりました。便利になりました。コロナも3年間も続くと、それが日常になってきています。元に戻すのが面倒だと感じることもできます。楽なこと、合理的なことだけを残して、面倒だからと言って大切なものを置き去りにしたり、失くしてしまってよいのでしょうか。ここで、しっかり立ち止まって、なぜそれを私たち日本人は大切に守ってきたのか、習慣や慣例となっているのかを原点に立ち返って考えるべきなのではないでしょうか。

ある会で、地域の方のこんな発言がありました。「卒業式に来賓を呼んでください。挨拶も紹介もなくいいです。私たち、今の3年生の顔を一度も見えてないんです。門出のお祝いをさせてください。」この言葉に胸を打たれました。その初老の女性の顔と亡くなった母の顔が重なりました。地域の人に地域の子の晴れ姿を見ていただきたい。コロナの3年間を乗り切った卒業生の門出を祝っていただきたい。ただ、それだけなのです。卒業生にとっても大事なことです。救急救命や、防災宿泊、職場体験、図書館や保健所などお世話になっているのです。もし大きな災害が起きてしまったら、町会で力をあわせて生き延びていくのです。地域社会とのつながりを伝えることも大事な教育なのだと思います。私たちは、一人ではないのです。人とのつながりは大切にしなければならないのです。

5組 お別れ会 3月2日



3年 球技大会 3月9日



2年 TGG 3月7日



2年 茶道教室 3月10日



3年 校外学習 よみうりランド 3月6日



3年 救急救命 3月8日

3年 TGG 3月16日



3年 落語を聞く会 3月14日



3年 茶道教室 3月3日



英語出前授業
大塚小学校
2月26日

